

- (注1) 睢陽：8世紀の唐の武将張巡が睢陽城に籠り、叛乱軍の攻囲に抵抗した
- 1721：公行が解散
- 1757：清が欧州船の寄港地を広州1港に限定
- 1760：公行が復活
- 1771：公行が再度解散
- 1782：公行が再復活
- 1839：林則徐がアヘンの没収・消却を行う
- 1840：アヘン戦争開始
- 1842：南京条約
- 1843：五港通商章程
：虎門寨追加条約
- 1844：望夏条約
：黄埔条約
- 1851：太平天国の乱開始
- 1853：捻軍蜂起開始
- 1855：ミャオ族の蜂起開始
- 1856：回民の蜂起開始
- 1856：第二次アヘン戦争開始
- 1858：天津条約
- 1860：北京条約
- 1864：太平天国滅亡
- 1865：ヤークーブ＝ベクが東トルキスタンで政権を樹立
- 1871：イリ事件
- 1881：イリ条約

10. 明治維新と日本の立憲体制

1 明治維新と諸改革

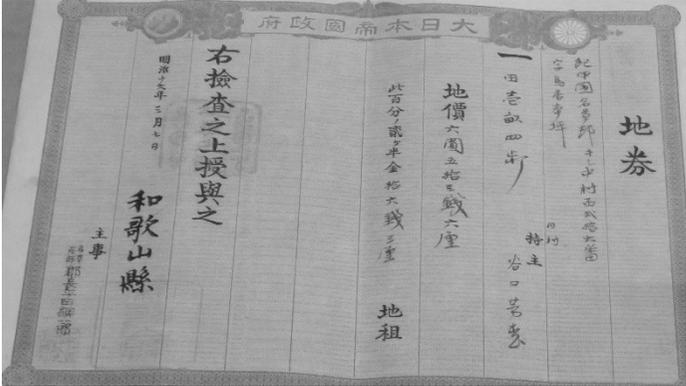
年次	できごと						
1868・3	<p data-bbox="391 372 559 415">五箇条の誓文<small>ごかじょう せいもん</small></p> <p data-bbox="391 426 587 469">翌日五榜の掲示<small>ごぼう</small></p> <table border="1" data-bbox="391 473 765 633"> <tr> <td>原案</td> <td>由利公正（福井藩）</td> </tr> <tr> <td>修正案</td> <td>福岡孝弟（土佐藩）<small>ふくおかたかちか</small></td> </tr> <tr> <td>最終案</td> <td>木戸孝允（長州藩）</td> </tr> </table> <p data-bbox="391 653 1131 1164"> 五箇条の誓文の原案にあった、「諸侯会盟」、修正案の「列侯会議」（雄藩会議）構想が、最終案では、「広く会議」へと完全に後退した。明治天皇が神に誓う形式で発布した。内容は、<u>（一）日本中から優秀な人を集めて会議をして決めよう</u> <u>（二）身分に関係なく日本を治めていこう</u>（三）政府や武士、さらに一般の国民もそれぞれの責任を果たして目標を達成していこう（四）これまでの悪い風習を捨てて道理にあった方法で何事もやっいていこう（五）知識を世界に広めていき、天皇中心に日本やこれまでの日本の伝統を大切にして日本を発展させていこう。 </p> <div data-bbox="399 1180 735 1362">  </div> <p data-bbox="426 1363 701 1456"> 五榜の掲示第三札 天草コレジヨ館 熊本県熊本市（著者撮影） </p> <p data-bbox="788 1180 1131 1483"> 五榜の掲示は、第一札～第三札の永世の定法とされた部分と、第四・五札の一時の覚札（一時の法）とに分類され、<u>第三札では、キリスト教の信仰を禁止した</u>。しか </p> <p data-bbox="391 1493 1131 1586"> し、1873年に起きた浦上信徒弾圧事件<small>うらがみ</small>で外国からの抗議を受けて第三札を撤去してキリスト教の布教を黙認した。 </p> <p data-bbox="278 1605 529 1638"> ・ 閏4 政体書布告 </p>	原案	由利公正（福井藩）	修正案	福岡孝弟（土佐藩） <small>ふくおかたかちか</small>	最終案	木戸孝允（長州藩）
原案	由利公正（福井藩）						
修正案	福岡孝弟（土佐藩） <small>ふくおかたかちか</small>						
最終案	木戸孝允（長州藩）						

年次	できごと
	<p>五箇条の誓文に基づき、政体書を制定した。太政官に権力集中させ、加えてアメリカ合衆国憲法を参考にして三権分立制を取り入れたほか、高級官吏を4年ごとに互選で交代させる仕組みを取り入れた（官吏の互選は1回で終了）。</p> <div data-bbox="395 542 1140 890" style="text-align: center;"> <p>太政官札・民部省札 世界のコイン館 香川県観音寺市 (著者撮影)</p> </div> <p>・7 ^{だじょうかんきつ}太政官札を発行、1869年11月には^{みんぶ}民部省札発行 政府は、旧藩札1,600種3,000万両の回収と戊辰戦争下の財政を賄い、かつ産業を振興する目的で太政官札を発行した。13年後に兌換化する予定であったが、1871年末までに予定額を超えた4,800万両、民部省札750万両、旧藩札3,855両余が流通した状態となって正貨に対する紙幣価値が下落して物価高騰の要因となった。近年の研究では、統一貨幣が定着する以前の過渡期の日本経済を支えたと評価されるようになった。</p> <p>・7 江戸を東京と改称</p> <p>・9 元号が明治と改まる（^{いっせいちげん}一世一元の制）</p> <p>1869・1 横井小楠が暗殺される</p>

年次	できごと
・ 5	戊辰戦争終結
・ 6	<p>版籍奉還</p> <p>版籍奉還は、薩長土肥四藩の藩主が願い出る形で実施され、土地（藩領）と人民を朝廷に返上。藩主は、非世襲の知藩事として旧藩領を治めたが、旧藩主と旧臣の主従関係は、原則的に否定された。知藩事の俸禄は、旧領収入の10分の1相当として藩財政から分離された。薩長土肥四藩を中心に軍功賞典を下賜して批判を抑え、そのほかの諸藩は、改めて領地領民を再交付されると誤解していたことから抵抗なく実施された。また、<u>多くの藩では、財政難から高禄者の禄を削減する方法がとられた。</u></p>
・ 7	<p><small>かいたくし</small> 開拓使設置</p> <p>明治初年に<u>ロシアが樺太に軍隊を増派したのに対し、日本は、衝突を回避するために軍隊ではなく、移民の派遣に留めた。</u>政府は、北海道の開発を進めるために開拓使を置いた。</p>
・ 9	<p>大村益次郎が暗殺される</p> <p>国民皆兵を進めていた大村益次郎が同じ長州藩出身の攘夷派の残党<small>こうじろなあと</small>神代直人らに襲撃された。</p>
・ 11	<p><small>だつたいそうどう</small> 脱退騒動</p> <p>長州藩では、財政難から戊辰戦争を戦った奇兵隊を含む諸隊を5000名に再編し、3000余名を解雇した。これに激昂した諸隊の一部が脱退して決起し、藩庁を包囲した。この時明治政府の要職にいた木戸孝允が帰藩して鎮圧した。維新功労者が同じ維新功労者に抑圧される革命に必ずつきまとう同士討ちの悲劇の一つである。</p>

年次	できごと
1870・9 ・12	<p>平民に苗字を許可</p> <p>工部省<small>こうぶ</small>が設置される</p> <p>鉄道・造船・土木の主管として工部省を設置。</p>
1871・1 ・2	<p>広沢真臣が暗殺される</p> <p>御親兵<small>ごしんべい</small>設置</p> <p>廃藩置県に先立ち、不測の事態に備えて薩摩・長州・土佐の3藩から選抜して御親兵を編制した。</p>
・4	<p>郵便制度発足</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div> <p><small>まえじまひそか</small> 前島密の建議で、郵便制度開始</p> <p>1873年には、全国均一料金制度を実施。</p> </div> </div>
・5	<p>新貨条例公布</p> <p>4進法の金貨の単位を一新する必要から、新貨条例を公布した。従来の1両を1円とし、円・錢・厘の単位で10進法を採用した。しかし、開港場に限り、銀貨（貿易銀）の通用を認めたため、実際は、金銀複本位制となった。</p>
・7	<p>廃藩置県</p> <p>廃藩置県前の政府の直轄地は、全国石高の4分の1の860万石に過ぎなかった。廃藩とともに、3府302県が設置され（最終的に3府72県）、旧藩主が就いていた知藩事も解任されて上京が命ぜられ、中央から府知事・県令が派遣されたことで、中央集権化が一挙に進んだ。藩から藩士に支給されていた禄は、政府から秩禄（家禄＋賞典禄）として支給された。</p>

年次	できごと
・ 7	<p>日清^{しゅうこうじょうき}修好条規</p> <p>日本は、対等条約を結べば清と宗属関係にある朝鮮に対して優位に立つ意図から、清は、欧米との不平等条約改正に好影響が出ると期待して互いに領事裁判権を相互に承認したという意味で対等条約である日清修好条規を結んだ。後に日清戦争勃発で国交が断絶したため失効した。</p>
・ 8	<p>(身分) 解放令</p> <p>江戸時代にえた・^{ひんか}罪人などと呼ばれていた被差別民を解放したのが解放令。しかし、江戸時代に彼らが従事していた皮革業などの職業的特権を喪失して生活は苦しくなり、しかも社会的な差別は続いた。</p>
・ 11	<p>琉球漂流民殺害事件</p> <p>琉球王国に属する宮古島の漁民が台湾へ漂着した際、54人が台湾原住民に殺害された(琉球漂流民殺害事件)。江戸時代以降、琉球王国は、日中両属の建前をとっていたが、日本からの抗議に清は、台湾は清領ではあるが、台湾先住民は、^{けがい}化外の民(文明が及ばない土地の民)として責任を回避。</p>
・ 12	<p>岩倉使節団が出発</p> <p>右大臣岩倉具視を全権大使とする岩倉使節団が欧米に向けて出発した。</p>
1872・2	<p>(^{じんしん}壬申) 戸籍</p> <p>前年の戸籍法に基づき、旧藩主や公家を^か華族、武士を^し士族、その他を^{へい}平民とする統一的戸籍である(壬申)戸籍が作成され、江戸時代の旧身分秩序が廃止された(四民平等)。<u>族籍を超えた婚姻や華士族が農工商に従事することが認可。</u></p>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 	<p>政府は土地の売買の自由を認め、所有者に地券を発行</p> <div style="text-align: center;">  <p>地券</p> <p>和歌山県立歴史博物館 和歌山県和歌山市 (著者撮影)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2 兵部省を廃止し、陸軍省・海軍省を設置 ・ 8 ^{がくせいほんぶ}学制頒布 <div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;"> <div style="text-align: center;">  <p>旧柳原小学校</p> <p>1876年建築。日本人大工が建てた擬洋風建築校舎。</p> <p>滋賀県近江八幡市 (著者撮影)</p> </div> </div> <div style="flex: 2; padding-left: 10px;"> <p>学制は、フランスの制度を模倣し、全国を8大学区に分けて、中学区と小学区を置き、<u>男女四民平等の国民皆学</u>を目指した。<u>小学校では、国語・算数・世界地理・歴史</u> (1881年には歴史は、日本史のみとなった) などが指導され、初期の教科書には、文部省編纂の『<u>小学読本</u>』や福沢諭吉著『<u>学問のすゝめ</u>』・『<u>西洋事情</u>』・『<u>世界国尽</u>』などが使用された。しかし、小学校運営費や授業料(1か月50銭)の住民負担を理由に、<u>学制反対一揆</u>が発生した。</p> </div> </div>

年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 9 	<p>琉球藩設置</p> <p>琉球漁民殺害事件で清国を非難するためには、琉球王国が日本に属している前提が必要であることから、廃藩置県が終わっているにもかかわらず、日本政府は、一方的に<u>琉球藩</u>を設置、<u>国王 尚泰</u>を琉球藩王とし、<u>華族</u>に列した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 	<p><u>富岡製糸場</u>が操業を開始</p> <p>現在世界遺産に登録されている。<u>群馬県</u>の官営模範工場<u>富岡製糸場</u>は、フランスの技術を導入した器械製糸工場、工女は、主に士族の娘から募った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 	<p><u>新橋</u>・<u>横浜</u>間で初めて<u>鉄道</u>が開業する</p>  <p>新橋—横浜間で稼働していた最古の蒸気機関車と50歳頃の筆者。 明治村／愛知県犬山市（著者撮影）</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 	<p>横浜の馬車道に初めてガス灯がともる（<u>文明開化</u>）</p>  <p>銀座煉瓦街模型 煉瓦街・人力車、鉄道馬車、ガス灯が見える。江戸東京博物館 東京都墨田区（著者撮影）</p> <p>“<u>散切り頭</u>を叩いてみれば、<u>文明開化</u>の音がする”</p>

年次	できごと
<p>・ 11</p>  <p>渋沢栄一像 東京都墨田区 (著者撮影)</p>	<p><small>こくりつぎんこうじょうれい</small> 国立銀行条例公布</p> <p>国立銀行条例は、<small>しぶさわえいいち</small> 渋沢栄一らが中心となり、不換紙幣整理を目的として公布。“国立”は、アメリカのナショナル＝バンク制度を直訳したもので、民間の株式会社。<u>国立銀行券は、兌換銀行券であることを義務付けられたから、第一、第二、第四、第五の4行の設立に留まった。</u></p>
<p>・ 11</p>	<p><small>ちやうへいこくゆ</small> 徴兵告諭</p> <p>徴兵告諭では、<u>四民平等の原則</u>で身分を問わずに兵役の義務が示された。告諭の中にあった“血税”の字に異人に血を抜かれると噂したことは事実だが、噂自体は、血税の文字が登場する10年前からあった。実際は、平民だけが徴兵されると思い、血税一揆を起こした。</p>
<p>・ 12</p>	<p><small>たいようれき</small> 太陽暦採用</p> <p>ライフスタイルの変化に影響を与えたのが、太陽暦の採用で、明治5年12月3日を明治6年1月1日とした。しかし、農村漁村などでは依然として旧暦の生活行事との関係が強く、太陽暦への移行には日数を要した。</p>
<p>1873・1</p>	<p><small>ちやうへいれい</small> 徴兵令公布</p> <p>徴兵令では、<u>国民皆兵</u>の方針に基づき、満20歳以上の男子を3年間兵籍に編入。当初は、該当者を全員兵役に就かせるだけの予算が不足していたため、戸主とその相続者、身長155 cm以下の者、代人料270円を支払った者（現在の貨幣価値で900万円相当。後に400円に引き上げられた）ほかの兵役免除規定を設けたため、<u>1876年時には対象者の3%程度しか現役兵はいなかった。</u></p>

年次	できごと
<p>・ 7</p>	<p><small>ちぞかいせいじょうれい</small> 地租改正条例公布</p> <p>地租改正は、江戸時代の歳入を落さないよう「旧来ノ歳入ヲ減ゼザル」方針で実施（1881年時点で旧貢租とほぼ同額の4500万円確保できた）した。<u>地租は、地券所有者に課せられ、地価の3%で金納であった。</u>地租以外に住民税や村入費がかかったので、<u>農民の負担が江戸時代と変わらなかったこと</u>や入会地のうちその所有権を立証できない場合は、官有地となったので、<u>地租改正反対一揆</u>が起きた。これを受けた<u>政府は、地租改正反対一揆と士族反乱が結びつくのを恐れた結果、1877年に地租を2.5%へ、地方税を1%から0.5%へ軽減した。</u>なお、地租は1898年に3.3%へ増徴された。</p>
<p>・ 10</p>	<p>明治六年の政変（<small>せいかんろん</small>征韓論政変）</p> <p><small>ないち</small>内治派（外遊組） （後から賛同した留守組）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  <p>岩倉具視 大久保利通 木戸孝允 大隈重信 大木喬任 (公家) (薩摩藩) (長州藩) (佐賀藩) (佐賀藩)</p> </div> <p>中立派（留守組）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  <p>三条実美 (公家)</p> </div>

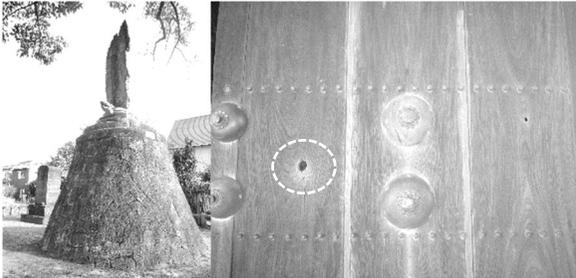
年次	できごと
	<p>征韓派（留守組）</p> <div data-bbox="381 378 1119 625" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  <p>西郷隆盛 (薩摩藩) 板垣退助 (土佐藩) 後藤象二郎 (土佐藩) 江藤新平 (佐賀藩) 副島種臣 (佐賀藩)</p> </div> <p>征韓論が廟堂の議題に上がった1873年、台閣（内閣）を占める要人として太政大臣三条実美と右大臣岩倉具視は、公家出身であったが、残る参議9名のうち、4名を討幕に何の功績もなかった佐賀藩出身者で占めていたのは、幕末時、一切政治運動に関与しなかった同藩は、藩主鍋島閑叟の主導の下、徹底した官吏養成教育を行っていたからで、その結果、実務に長けた人材を数多く輩出した。</p> <p>1871年末、岩倉使節団が出発する際、西郷隆盛ら留守政府組に対し、自分たちが帰国するまでは重要な政策を遂行しないように釘を刺していたが、結局外遊組は、彼らが帰国すると約した日を大幅に超過したこともあり、留守政府は、1872年から1873年の夏までに様々な重要政策を実行していた。その中心にあったのは、参議司法卿の江藤新平で、能吏の江藤は、司法卿としての職務を活かして山城屋事件で山県有朋を、尾去沢銅山事件で井上馨を厳しく追及して長州閥を削いでいた。江藤は、“討幕の次は討閥だよ（討幕の次は薩長藩閥を倒す）”と口癖にしたという。</p> <p>そこに外遊組が相次いで帰国したが、ただ物見遊山をしただけではないかと国民からの支持を失っていた。</p>

年次	できごと
	<p>これに危機感を持ったのが、外遊組でまだ参議ではなかった伊藤博文で、伊藤は、長州閥を追い込む江藤を憎み、当時健康を害していた長州閥の総帥木戸孝允ではなく、薩摩閥の大久保に接近した。</p> <p>1868年12月、対馬藩から朝鮮に使節が派遣され、日本では政権が交代したことや修好の継続を告げる文書を手交しようとしたところ、朝鮮側は、<u>日本の文書に宗主国である清しか使用できない「皇」や「勅」が使用されている（書契問題）</u><u>ことを理由に受理を拒否した</u>。当時朝鮮は、保守派の国王実父の大院君（李昰応）が実権を握っており、欧米にならう日本に反感を抱いていた。この時の朝鮮の対応を無礼だとして不平士族が武力で脅して朝鮮を開国させるべきだとする征韓論を唱えた。この時、木戸孝允などは同調している。つまり、征韓論は、在野から沸き起こったもので、西郷ら征韓派が最初に言い出したものではない。</p> <p>外遊組が帰国する前に征韓問題を解決させたいと考えた西郷隆盛は、自ら丸腰で朝鮮と交渉にあたるので使節として派遣してもらいたいと留守組参議に協力を求めた。この時板垣退助が丸腰で朝鮮に乗り込めば朝鮮の攘夷派に殺害されるから最初から軍隊を率いるべきだと正真正銘の征韓論を主張したのに対し、西郷は、それでは朝鮮に失礼だから平和的に交渉すると譲らなかった。こんにち西郷隆盛は、征韓論者だったと説明する人が少なくないが、西郷は、閣議で一度も征韓論を唱えたことはない。では、なぜ西郷を征韓論者と断定するのか。</p>

年次	できごと
	<p>西郷は、7月29日付の板垣退助宛の手紙の中で、「自分を大使として朝鮮に派遣することに賛成して欲しい。私は、おそらく朝鮮の暴民に殺害されるから、それを名分として板垣が兵を率いて朝鮮へ乗り込めばよい」との“使節謀殺論”を展開していた。つまり、西郷は、自分の身体を犠牲にして征韓を行うつもりであったという。しかし、これだけで西郷を征韓論者と決めつけるのは早計だろう。なぜなら、西郷は、外遊組が帰国して廟堂に参加してくる前に使節派遣だけは天皇の裁可を得ておきたいと考えており、自分が行けば殺されるから、それを口実に征韓を実行すればよいと板垣に花を持たせてまずは、板垣に大使派遣に賛成させようとしたかもしれないからだ。つまり西郷は自分が行っても殺されない自信があったとすれば、西郷は征韓論者ではなくなる。</p> <p>今となっては西郷の真意はわからない。しかし、同時に西郷は、自分の派遣が「内乱を願う心を外国へ向けることで国を興すの遠略になる」とも述べており、征韓を実行して最も心配していた鹿児島県（旧薩摩藩）の不平士族の不満解消に利用したいと考えていたと見られており、その意味では、西郷は紛れもなく征韓論者である。ともに戊辰戦争の英雄と見られていた西郷と板垣は、当時不平士族の敬愛と期待を一身に集めており、両者は、百姓軍（徴兵軍）は役に立たないと考えていた。全国の不平士族が征韓を叫んで止まなかったのも徴兵制反対の裏返しの感情であり、西郷や板垣は、彼らの頼りになる代弁者であった。</p>

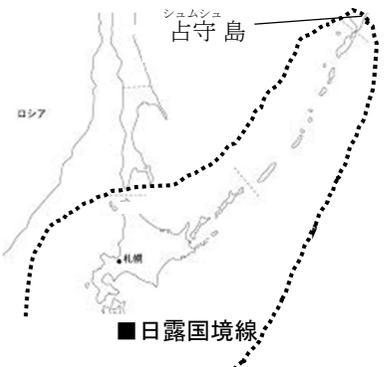
年次	できごと
	<p>西郷が西南戦争で敗死する直前に城山から敵軍を見降ろして「百姓兵は強かった」と言ったとされるのも、その認識は誤っていたけれども、西郷があくまで国軍は、士族軍でなくてはならないと考えていたことを示している。</p> <p>8月17日、板垣宛の手紙が功を奏したのか、留守政府の閣議で西郷大使派遣が決定された。西郷があればほどまでに使節派遣に拘ったのは、幕末に島津斉彬から示唆されていたロシアの南下に備えようとしていたことは間違いない。朝鮮が自力で近代化に踏み切れれば越したことはないが、保守派の大院君の下ではそれも望めないことは認識していただろう。仮に西郷が征韓論者であったとしても、単なる帝国主義者ではなく、日本の国防について憂慮する立場であったことは理解しておく必要がある。西郷派遣の件は、三条実美から上奏され、天皇の岩倉らが戻ってきて再議するようとの条件付きで裁可された。再審議は、あくまでも派遣の再確認のために行うと認識した西郷は、8月19日付の板垣宛の書簡で「生涯の愉快」と書いている。</p> <p>一方、帰国した岩倉、大久保（8月31日、馬車から落馬して頭を強く打った木戸孝允は、脳挫傷^{のうざしやう}を負い、この後ずっと頭痛に悩まされ、閣議を病欠し続けた）らは、戦争になるかもしれない派遣を中止して内治（国内の安定を図る）を優先すべきだと真っ向から反対した。</p> <p>大久保も征韓には反対ではなかった。欧米を視察した結果、先に殖産興業を進めたかった大久保は、外征費用と殖産興業にかかる経費が財税上競合してしまうことを恐れた。</p>

年次	できごと
	<p>同時に大久保は、不平士族の歡心をかうことになる征韓の功績を江藤ら留守区政府組に奪われることを回避したかった。大久保が内心征韓に反対していなかったことは、後に^{カンファド}江華島事件を利用して事実上の征韓を実行したことで明らかだろう。大久保のとっても鹿児島県の不平士族は目の上のたん瘤^{こぶ}だった。</p> <p>10月11日、業を煮やした西郷は、三条に対して派遣が実現しないなら、鹿児島県士族との約束を守れないから自決すると恐喝した。10月15日、岩倉が大久保を裏切り、派遣に同意したので、怒った大久保は、参議辞職を提出、続いて岩倉・木戸も辞意を表明した。尚、大隈重信は、10月13日に反対を表明するまでは、傍観に徹した。10月18日未明、三条は、^{じんじふせい}人事不省となった（12月末まで復帰できなかったので仮病ではなかったろう）。</p> <p>ここで伊藤博文と大久保が、世にいう“一の秘策”を繰り出す。19日、黒田清隆から宮内少輔^{よしいともざね}吉井友実の薩摩ラインを使い、宮内卿^{とくだいじさねつね}徳大寺実則から天皇へ岩倉右大臣を太政大臣代理とする勅語が降るように工作が行われた結果、10月20日、岩倉具視へ太政大臣代理を命じる勅語が降った。これで岩倉は、堂々と西郷派遣反対との個人の意見を奏上できるようになった。10月24日、天皇から岩倉へ派遣中止の勅書が降った。全てを悟った西郷は、前日の23日に辞意を表明、24日には他の征韓派参議も台閣を去った。一連の政争を明治六年の政変（征韓論政変）という。</p>

年次	できごと
<p>・ 11</p> <p>1874・1</p>  <p>板垣退助像 高知城 高知県 高知市 (著者撮影)</p>	<p>内務省が置かれ、大久保利通が初代内務卿に就任 警察・地方行政を主管する内務省を設置。</p> <p><small>みんせんぎいん</small> 民撰議院設立の建白書</p> <p>明治六年の政変で台閣を去った西郷を除く参議板垣退助・ 後藤象二郎・江藤新平・副島種臣ほか、土佐藩出身の <small>おかもとけんざぶろう</small> <small>ふるさわしげる</small> 岡本健三郎・古沢滋、福井藩出身の由利公正、阿波藩出身 の<small>こむろしのぶ</small>の8名が日本最初の政社愛国公党を結成し、政 府左院に国会の開設を請願する「民撰議院設立の建白書」 (起草者古沢)を提出した。「公議」により政治を行うこと は、例えば、薩土盟約の約定にも見られており、五箇条の誓 文にも、「万機公論ニ決スヘシ」とうたわれていた。1869年 には左院にかわる立法機関として各藩の代表者を集めた公 議所が設けられた(同年に集議院と改称)。 自由民権運動の起点ともなった民撰議院設立の建白書が出 された背景には、福沢諭吉の『西洋事情』、<small>なかむらたけひら</small> 中村正直の『自由之理』、<small>なかえしげみち</small> 中江兆民の『民約訳解』などで西洋の政治 制度や政治思想が既に紹介されていたことによる。</p>
<p>・ 2</p>	<p>佐賀の乱</p>  <p>佐賀の乱戦没者慰霊碑 佐賀城門に残る銃痕 佐賀県佐賀市 (著者撮影)</p>

年次	できごと
<p>・2</p>	<p>明治六年の政変で帰郷した江藤新平は、同郷の島義勇<small>しまよしたけ</small>とともに佐賀の乱を起こして敗れ、単身西郷隆盛のもとへ助勢を依頼しに行くも拒絶された。捕縛され佐賀城内で斬首された。</p> <p>台湾出兵</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="flex: 1;"> <p>明治六年の政変で西郷隆盛が鹿児島へ帰郷すると、全国の不平士族の間では、西郷が征韓を希望したのに、大久保が阻止したのではないかとの憶測を生んだから、政府は、武力行使を辞さない姿勢を示す必要に迫られており、1874年2月、大久保と大隈が鹿児島県士族の参加を容認した（実際に参加する）台湾出兵と日本帰属を意図した「台湾蕃地処分要略」を策定し、西郷従道が出兵を強行した。しかし、<u>征韓に反対しながら征台を行おうとする矛盾を衝いた木戸孝允が参議を辞した。また、<u>征討軍が士族だけで編成され、徴兵を動員しなかったことで国民皆兵制を進めていた山県有朋は、出兵に反対した。</u></u></p> <p>出兵に対し清は、抗議をしたが、大久保が渡清して李鴻章と交渉した結果、清は日本の出兵を正当と認め、犠牲者への見舞金を支払った。この時日本は、清が琉球への支配権を放棄したと認識した。1875年には、<u>琉球藩に対し、清への朝貢停止を命じ、琉球藩を内務省の管轄とした。</u></p> </div> </div> <p>・4</p> <p>板垣退助が高知に政社立志社<small>りっししや</small>を結成</p> <p>板垣退助が高知<small>こうち</small>に戻り、植木枝盛<small>うえきえもり</small>・片岡健吉<small>かたおかけんきち</small>・林有造<small>はやしゆうぞう</small>らと政社立志社を結成した。</p>

年次	できごと
<p>・ 10</p> <p>1875・2</p>	<p>屯田兵制度は、士族授産（士族の働き口）の意味もあり、北海道の開拓と北方の警備にあたる。屯田兵は、徴兵ではなく、志願兵制であり、西南戦争や日清・日露戦争に従軍した。</p> <p>大阪会議</p> <div data-bbox="408 546 808 813" data-label="Image"> </div> <p>花外楼の壁にかかるレリーフ 大阪府大阪市（著者撮影）</p> <p>大久保利通が政権安定のため、明治六年の政変で下野していた板垣退助と台湾出兵で下野していた木戸孝允を参議として政府に復職させる意図から三者の会合がもたれた。これを大阪会議という。会議では、（1）地方官会議（2）立法機関としての集議院に代わる元老院、司法機関としての大審院の設置（3）参議と省卿の分離が決まった。また、会議の後の4月、（1）（2）を記す漸次立憲政体樹立の詔が發布された。</p> <p>・ 2 板垣退助が大阪で政社愛国社を結成 板垣退助が主に西日本にあった政社を糾合して大阪に愛国社を結成したが、板垣退助が大阪会議の結果、参議に復帰したため、愛国社は、自然解消した。</p> <p>・ 4 漸次立憲政体樹立の詔</p> <p>・ 5 樺太・千島交換条約 1854年の日露和親条約で「両国雑居地」とされた樺太の領有問題は、その後の幕府とロシアとの間で協議されたが合意には至らなかった。</p>

年次	できごと
 <p>榎本武揚像 東京都墨田区 (著者撮影)</p>	<p>明治政府は、1870年に樺太開拓使を置いた。黒田清隆は、最終的に樺太を放棄して北海道の開拓に専念すべきと主張した。黒田の推薦を受け、初代駐露公使となった榎本武揚が樺太・千島交換条約を締結した。ロシアは、当初全千島を渡すつもりはなかったが、榎本の巧みな外交術で、<u>樺太をロシア領とする代わりに得撫島以北の千島列島を日本領とし</u>、締結後10年間は、樺太での日本の交易権及び周辺海域の日本の漁業権を認めた。この結果、<u>樺太や千島に住んでいたアイヌ人は、日本国民とロシア国民に分離された。</u></p> <p>・6 <small>さんぼうりつ しんぶんし</small> 讒謗律・新聞紙条例 讒謗律は、著作・文章での政府批判を取り締まる法令で、新聞紙条例は、新聞・雑誌での政府批判を取り締まる法令。</p> <p>・9 <small>カンファド</small> 江華島事件</p>  <p>1873年10月に征韓派参議団が下野し、翌11月の大院君の失脚や1874年の台湾出兵も手伝い、一旦征韓論は、下火となった。</p> <p>江華島</p>  <p>シムシユ 占守島 ロシア 札幌 ■日露国境線</p>

年次	できごと
1876・2	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;">  <p>大院君</p>  <p>高宗</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;"> <p>*長年閔妃の写真とされてきたものが誤りであったことが判明した。よって、今のところ彼女の写真は、存在しない。</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>大院君（李是応）</p> <pre> graph TD A[大院君 李是応] --- B[高宗 二十六] A --- C[載冕 ジェミョン] B --- D[閔妃] B --- E[純宗 二十七] </pre> </div> </div> <p>失脚した大院君に代わり、親政を開始した高宗は、側近から中国（清）との関係上からも日本と友好な交隣関係を維持すべきだと進言を受け、書契を受け入れたが、再度書契を持参した日本使節が西洋式の大礼服を着用していたことが高宗の反感をかい、交渉が決裂した。</p> <p>日本の軍艦「雲揚」号艦長井上良馨は、測量などを目的にボートで江華島草芝鎮砲台に接近したところ、発砲があったので、翌日に「雲揚」号の搭載砲で応戦して上陸して焼き払った。これを江華島事件という。</p> <p>日朝修好条規</p> <p>日本は清の了解を得つつ、江華島事件を背景に日朝修好条規を結んで朝鮮を開国させた。釜山・仁川・元山港の3港の開港、日本の領事裁判権を認め、付属の通商章程で無関税特権を獲得したが、日本人が開港場以外の朝鮮の内地で通商することは認めていなかった。征韓論は下火となった。</p>

年次	できごと
	<p>また、同条約第一款では、「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ」と表記されたが、長い間中国を宗主国としてきた朝鮮にとっては、属国自主の立場を自認していたことに矛盾しないと解釈できる余地を残した。一方、日本にとっては、朝鮮が近代国際秩序における属国（植民地）ではなく、文字通り独立自主の国だと解釈できる両義的な表現が挿入された。この後、李鴻章は、一転して朝鮮の属国自主を否定し、内政・外交に干渉を開始した。</p>
<p>・3</p>	<p>廃刀令</p>
	<p>明治政府による士族解体政策が続く中で、政府は、士族の身分を表示していた刀の携帯を禁止する廃刀令を出した結果、士族反乱が連続して起きた。</p>
<p>・8</p>	<p>国立銀行条例改正</p>
	<p>当時政府は、士族反乱を警戒していたので、<u>士族が金禄公債証書を担保に国立銀行を設立しやすくなるように、国立銀行条例を改正した。</u>従来、設立者が資本金の4割を正貨（金貨・銀貨）で積み立てる必要があったのを、2割まで軽減された。さらに、<u>国立銀行券の兌換義務を外した結果、国立銀行の設立が相次ぎ、1879年までに百五十三国立銀行が設立された。</u>このうち華族の出資で設立されたのが第十五国立銀行である。</p>
<p>・8</p>	<p>秩禄処分</p>
	<p>政府は、家禄・<u>賞典禄</u>を全廃する代償として、受給者には5年～14年間分の価額の金禄公債証書を与える秩禄処分を行った。</p>

年次	できごと
	<p>公債ゆえに手放さずに保持していれば、利子が付いたが、6割強の士族が手にする利子は、日割り計算で約 8 銭に過ぎず、これは、東京での男子の最低日給の 3 分の 1 に過ぎなかった。公債を抵当に金を借りる者が後を絶たず、また、政府が 1878 年 9 月以降に公債の売買を可とすると、商売を始めた士族の多くが失敗した（士族の商法）。政府は、士族に対し、事業資金の貸付や屯田兵制度など士族授産の方策を採ったが、成功した例は少なかった。</p> <p>・ 10 <small>おがさわらしょとう</small>小笠原諸島の領有をアメリカ・イギリスに通知</p> <p><u>もともと小笠原諸島は、日本人に発見されたが、日本人定住者はおらず、開国前から欧米系住民が定住していた。ペリーも立ち寄っており、幕府は、1861 年に軍艦を派遣して領有を確認し、入植者を送り込んだ。しかし、入植者は、日本に引き上げたため、欧米系住民だけが残っていた。1876 年、政府は官吏を派遣して英米に対し領有を宣言、欧米系住民は、日本に帰化した。</u></p> <p>・ 10 熊本で神風連の乱（敬神党の乱）が起る</p> <p><small>おおたくろともお</small>大田黒伴雄以下の敬神党が蜂起し、熊本県令 <small>やすおかりようすけ</small>安岡良亮（土佐藩）と熊本城鎮台司令官 <small>たねだまさあき</small>種田政明（薩摩藩）の両名を殺害。</p> <p>・ 10 福岡で秋月の乱が起る</p> <p>旧秋月藩士族が挙兵した。</p> <p>・ 10 山口で萩の乱が起る</p> <p>元参議 <small>まげらいっせい</small>前原一誠が同志とともに挙兵した。</p> <div data-bbox="957 1342 1122 1522" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="985 1522 1081 1549">前原一誠</p>

年次	できごと
<p>1877・1</p> <p>・2</p>	<p>地租を2.5%へ軽減</p> <p>政府は、前年以來多発する地租改正反対一揆と士族反乱が結びつくことを恐れ、地租を2.5%に軽減した。</p> <p>西南戦争</p>  <p>政府軍司令官熊本城司令官 山県有朋 谷干城</p> <p>熊本地震で被災する前の熊本城 山県有朋騎馬像 小倉14連隊 熊本県熊本市・山口県萩市（著者撮影） 乃木希典</p> <p>西郷暗殺計画があつたのかなかつたのか、現存史料では何も書かれていないのでわからないが、西南戦争が起きた時、盟友大久保利通は、叛乱軍に西郷がいないと思っていたことを考えれば、旧薩摩藩出身者の警察官を鹿児島に潜入させた目的は、西郷刺殺ではなく、西郷と私学校の動向を探らせることにあつたと考えるべきだろう。</p> <p>西郷隆盛を担いだ私学校党ら1万1千名が西郷暗殺計画などに関して政府に糺したいことがあるとして兵を率いて鹿児島を出立し、谷干城を司令官とする熊本城を舞台に政府軍と交戦。その後田原坂や植木で激しい戦闘を行うも、9月、鹿児島の城山で西郷以下、玉砕した。</p>

年次	できごと
・ 5	木戸孝允が病死
・ 6	立志社建白 かたおかけんきち 片岡健吉が政府の失政を 8 条にして天皇に建白した。
1878・ 4	愛国社再興
・ 5	きおいさか 紀尾井坂の変 大久保利通が不平士族に暗殺される。

2 民権運動の激化と立憲制の確立

年次	できごと
・ 7	ちほうさんしんぽう 地方三新法制定 地方三新法とは、府県の地方行政単位を定めた（一）郡区町村編制法、各地で民会として設置されていた府県会を全国的制度として法制化した（二）府県会規則、地方税に統一して地方税規則の 3 つを指す。
1879・ 4	沖縄県設置 警察官と軍隊計 560 余で首里城に乗り込み、強引に沖縄県の設置を言い渡した。清は承認せず、琉球士族の中には、従来の日中両属の維持したまま主体性を発揮しようと、琉球救国運動を起こす者もいた。翌年、前アメリカ大統領グラントが日清間の調停（①宮古島・八重山のいわゆる先島諸島を清へ割譲する②日清修好条規を改定し、日本人の清国内地通商を認め、日本に最恵国待遇を与える）に乗り出して両国が同意したが、最終的に清が批准しなかった。結局、琉球帰属問題は、下関条約を経て日本領が確定した。琉球藩の設置から沖縄県の設置までの日本の一連の政治過程を琉球処分という。

2 民権運動の激化と立憲制の確立

年次	できごと
1880・3	<p>国会期成同盟<small>こっかいせいどうめい</small>が結成される</p> <p>愛国社を拡大発展させる形で片岡健吉<small>かたおかげんきち</small>・河野広中<small>こうのひろなか</small>らが国会期成同盟を結成した。</p>
・4	<p>集会条例公布</p> <p>集会条例は、民権派の集会・結社を規制する目的で出された。対象は、国会期成同盟ではなく、同盟の中核の愛国社。</p>
1881・7	<p>開拓使官有物払下げ事件<small>かいたくしかんゆうぶつはらいさ</small></p>
・10	<p>明治十四年の政変</p> <p>維新三傑の死で始まった明治十年代、政府は、西南戦争後のインフレ抑制を迫られていた。また、インフレにより富裕化したことと、地方三新法の府県会規則により、政治に目覚めた豪農を取り込んだ自由民権派が議会開設要求を活発化させる中で、政府主導の議会開設・憲法制定を目論んでいた。そこに非薩長閥の大隈重信が英国流議院内閣制の採用と即時議会開設を主張する意見書を提出した。続けて福沢諭吉が主宰する交詢社<small>こうじゆんしゃ</small>が同じ英国流議院内閣制を標榜する私擬憲法案を発表すると、岩倉具視から大隈案を見せてもらった井上毅は、大隈の背後で福沢系官僚が暗躍しているのではないかと反発を覚え、岩倉具視に対して日本は英国流議院内閣制ではなく、議会に対して内閣の権限が強いプロシア流憲法に倣うべきだと説いた結果、岩倉は、井上の意見に傾き、しかもドイツ流憲法の起草者には、伊藤博文をあてることを想定した。伊藤が大隈案を見たのは、既に岩倉具視—井上毅によるお膳立てが終わっていた6月のことである。</p>

年次	できごと
 <p>五代友厚像 大阪取引所 大阪府 中央区 (著者撮影)</p>	<p>当初議院内閣制に好意的だった伊藤は、大隈案にあった議院内閣制の採用に異議を唱えていない。</p> <p>7月2日、井上毅が大隈と福沢系官僚が伊藤博文を出し抜いて立憲政体樹立の主導権を握ろうしていると伊藤に説いたことが功を奏した。必ずしも大隈案の内容には反対ではなかった伊藤には、これまで協調してきた大隈が自分を出し抜こうとしていると映ったからである。</p> <div style="display: flex; align-items: center; margin: 10px 0;">  <div style="flex: 1;"> <p>1881年7月26日付の「東京横浜毎日新聞」は、開拓使長官黒田清隆が同郷の<small>ごだいともあつ</small>五代友厚が経営する関西貿易商会（正式名関西貿易社。しかも払下げの大部分は、別会社の北海社。）に官有物を廉価で払下げしようとしていると報じ、翌日には福沢系の「郵便報知新聞」が取り上げたのを機に、国会開設要求と結びついて反政府運動に発展した。これを開拓使官有物払下げ事件という。福沢系新聞が騒ぎ立てたこともあり、福沢と連携する非薩長閥の大隈重信がリークして、板垣退助らの民権派とも結びついて薩長藩閥政府の打倒をもくろんでいるのではないかとする陰謀論が飛び交った。在野では、民権派を中心に私擬憲法案が続々発表され、憲法制定の主導権を民権派に奪われることを恐れた伊藤は、薩長閥の結束を固める必要性が生じ、陰謀論に乗じることにした結果、10月、大隈の罷免と払下げ中止を決断した。これを明治十四年の政変という。伊藤は併せて天皇の名で明治23年の議会開設を約した「国会開設の勅諭<small>ちよくゆ</small>」を出した。</p> </div> </div>

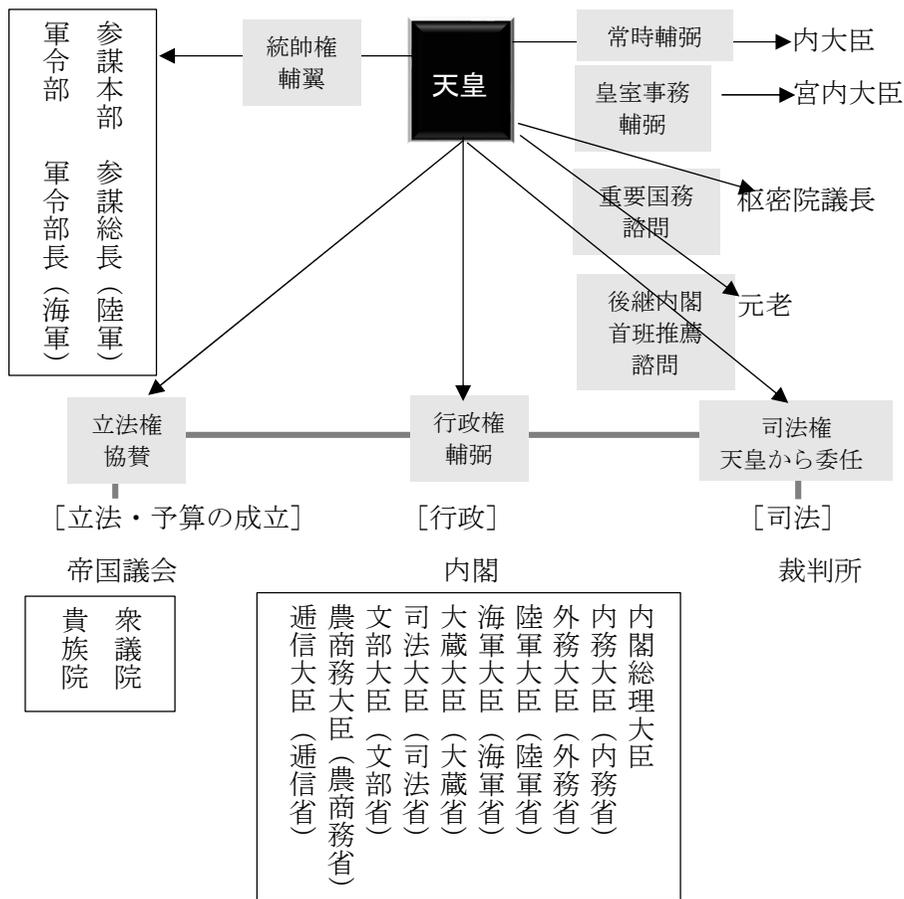
年次	できごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 	<p>板垣退助が自由党を結成</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 	<p>松方財政開始</p>
	<p>インフレの最大要因は、西南戦争の戦費調達・殖産興業のための紙幣増発であったが、ほかに国内産業の不振と改税約書以来の輸入超過も重なっていた。</p> <p>そこで、大蔵卿（後に大蔵大臣）松方正義は、官営事業を民間に払い下げて歳出を減らす（緊縮財政）とともに、民間資本育成による国内産業の新興をはかり、輸出を伸ばして金の流入をはかった。これを松方デフレ政策（松方財政）という。また、増税による紙幣整理や唯一の発券銀行である中央銀行（日本銀行）を創設して紙幣流通量の管理を行った結果、特に生糸を生産していた中部や北関東の農村を中心に激しいデフレに見舞われて不況に陥った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 11 	<p>日本鉄道会社設立</p> <p>日本最初の私鉄として日本鉄道会社が華士族の出資で設立され、政府から手厚い保護を受けた。</p>
<p>1882・3</p>	<p>憲法調査のため、伊藤博文らを欧州へ派遣</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <p>伊藤は、ベルリン大学教授グナイス、ウィーン大学教授シュタイン、グナイスの弟子モッセに学んだ。憲法草案は、ドイツ人顧問ロエスレルの助言を受けて井上毅・金子堅太郎・伊東巳代治らが起草した。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 5px;"> 井上毅 金子堅太郎 伊東巳代治 </div>

年次	できごと			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3 	大隈重信が立憲改進黨 ^{りっけんかいしんとう} を結成			
	政党名	代表	主義	支持層
	自由党	板垣退助	フランス流 一院制 主権在民 普通選挙	士族・豪農 自作農
	立憲改進黨	大隈重信	イギリス流 二院制 君民同治 制限選挙	府県会議員 実業家 (ブルジョワ)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 	岐阜事件 板垣が岐阜遊説中に暴漢 ^{ぼうかん} に襲撃され、愛知県病院長後藤新平 ^{ごとうしんぺい} が治療にあたった（“板垣死すとも自由は死せず”と言ったのは嘘）。			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 5 	大阪紡績会社設立  <p style="text-align: center;"> ガラ紡 ミュール紡績機 リング紡績機 トヨタ産業技術記念館 愛知県名古屋市（著者撮影） </p> <p> 大阪紡績会社は、蒸気力で動くミュール紡績機を用いた民間初の 1 万錘規模の紡績工場で、<u>初めて夜間電灯をつけての昼夜 2 交代制を導入した</u>。後にミュール紡績機より生産の高いリング紡績機を導入して生産力を増大させた。 </p>			

年次	できごと
・ 6	集会条例改正 自由党の地方拡大を阻止するため、政党支部の設置を禁止。
・ 10	日本銀行設立 中央銀行として 日本銀行 を設立した。
・ 11	板垣退助と後藤象二郎が渡欧 政府が自由民権運動を弛緩させるため、三井から 2 万ドル融通させて板垣と後藤を外遊させた。
・ 11	福島事件（自由党激化事件が始まる） 福島県令三島通庸 <small>みしまちつね</small> の圧政に対し、県会議長河野広中 <small>こうのひろなか</small> が扇動した。
1883・ 3	高田事件
・ 5	国立銀行条例再改正 開業からむこう 20 年間で銀行券を発行できない普通銀行へ転化させた（日本銀行を唯一の紙幣発行銀行とする）。
・ 8	伊藤博文一行が憲法調から帰国
1884・ 3	制度取調局 <small>せいどとりしらべきょく</small> を設置 伊藤博文が長官となって、華族令・内閣制度の調査や研究を行った。
・ 5	群馬事件
・ 5	加波山事件 栃木県令三島通庸暗殺計画。自由党解党の契機となった。
・ 7	華族令制定 将来の貴族院議員の構成を目的として 華族令 を公布し、公・侯・伯・子・男の 5 つの爵位をもうけた。
・ 10	自由党解党

年次	できごと																				
<ul style="list-style-type: none"> ・ 10 ・ 12 1885・ 5 ・ 11 	<p>ちちぶ 秩父事件</p> <p>こんみん 困民党などが地租軽減を求めて蜂起した秩父事件が起きた。</p> <p>大隈重信らが立憲改進黨を離党</p> <p>日本銀行が銀本位制へ移行（銀兌換銀行券）</p> <p>大阪事件</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p>大井憲太郎 景山英子</p> <p>国会開設が約束され、展望を見失った急進派民権家大井憲太郎と景山英子らは、対外進出に活路を見出し、板垣退助と後藤象二郎が構想した朝鮮独立党を支援するために立案したクーデター計画を引き取って実行しようとした矢先に逮捕された（大阪事件）</p> <p>大井らは、クーデター成功の暁には、朝鮮の宗主国である清と日本との間に軍事的緊張が避けられなくなるから、その緊張を利用して国内で民権派を蜂起させて藩閥政府を打倒することを目論んでいた。</p>																				
<ul style="list-style-type: none"> ・ 12  <p>伊藤博文像 生家 山口県萩市 (著者撮影)</p>	<p>内閣制度発足</p> <p>内閣総理大臣や各大臣が個別に天皇に対してのみ責任を負う内閣制度が発足。初代内閣総理大臣には伊藤博文が就任し、太政大臣だった三条実美は、内大臣に就任した。</p> <table border="1" data-bbox="419 1441 1103 1586"> <tr> <td>内閣総理大臣</td> <td>伊藤博文（長）</td> <td>海軍大臣</td> <td>西郷従道（薩）</td> </tr> <tr> <td>外務大臣</td> <td>井上馨（長）</td> <td>司法大臣</td> <td>山田顕義（長）</td> </tr> <tr> <td>内務大臣</td> <td>山県有朋（長）</td> <td>文部大臣</td> <td>森有礼（薩）</td> </tr> <tr> <td>大蔵大臣</td> <td>松方正義（薩）</td> <td>農商務大臣</td> <td>谷干城（土）</td> </tr> <tr> <td>六軍大臣</td> <td>大山巖（薩）</td> <td>逓信大臣</td> <td>榎本武揚（幕）</td> </tr> </table> <p>薩長閥からそれぞれ4名ずつを入閣させた。</p>	内閣総理大臣	伊藤博文（長）	海軍大臣	西郷従道（薩）	外務大臣	井上馨（長）	司法大臣	山田顕義（長）	内務大臣	山県有朋（長）	文部大臣	森有礼（薩）	大蔵大臣	松方正義（薩）	農商務大臣	谷干城（土）	六軍大臣	大山巖（薩）	逓信大臣	榎本武揚（幕）
内閣総理大臣	伊藤博文（長）	海軍大臣	西郷従道（薩）																		
外務大臣	井上馨（長）	司法大臣	山田顕義（長）																		
内務大臣	山県有朋（長）	文部大臣	森有礼（薩）																		
大蔵大臣	松方正義（薩）	農商務大臣	谷干城（土）																		
六軍大臣	大山巖（薩）	逓信大臣	榎本武揚（幕）																		

年次	できごと
<p>1887・9</p> <p>・10</p> <p>・12</p>	<p>条約改正交渉で世論の反発を受けた井上馨外相が辞職</p> <p>三大事件建白運動</p> <p>井上馨外相の条約改正交渉の内容が国益を損なうとして民権派が大団結をはかった。片岡健吉は、地租の軽減、言論・集会の自由、外交失策の挽回の三要求を掲げて建白書を元老院に提出した（三大事件建白運動）。</p> <p>保安条例公布</p> <p>内務大臣山県有朋が保安条例を公布し、民権派を皇居 3 里外の地に最長 3 年間追放した。追放者は、451 名におよんだ。</p>
<p>1888</p>	<p>枢密院設置</p> <p>明治憲法草案を審議するために枢密院を設置した（初代枢密院議長伊藤博文）。枢密院は、憲法制定後は天皇の諮問機関となった。</p>
<p>1889・2</p>	<p>大日本帝国憲法発布</p> <p>大日本帝国憲法は、君主の単独の意志によって制定される欽定憲法の形をとり（反語は、民定憲法）、2月11日の紀元節に発布された。大日本帝国憲法は、天皇主権を規定したといわれるが、正確ではない。表向きは、天皇は統治権の総覧者として規定されたが、実際は、<u>緊急勅令・文武官の任免・統帥権・編制大権・宣戦、講和、条約の締結を指す外交大権などの天皇大権を含む行政事項は内閣の、統帥事項は統帥部の輔弼（輔翼）を受け、立法事項と予算の成立は、議会の協賛を必要とした。</u></p> <p>帝国議会は、貴族院と衆議院の二院制で、衆議院に予算先議権があった以外は、両院の権限はほぼ平等であった。</p>



■衆議院議員選挙法改正史

公布年	施行年	公布時の内閣	直接 国税	性別 年齢	人口比	選挙区
1889	1890	黒田清隆	15円	満25歳以上の男子	1.1%	小
1900	1902	山県有朋Ⅱ	10円		2.2%	大
1919	1920	原敬	3円		5.5%	小
1925	1928	かとうたかあき 加藤高明	なし		20.8%	中
1945	1946	しではらきじゅうろう 幣原喜重郎		満20歳以上の男女	50.4%	大

年次	できごと
<p>・ 5</p> <p>1890・7</p> <p>・ 10</p> <p>・ 11</p>	<p><small>みんぽうてんろんそう</small> 民法典論争</p> <p>フランス人ボアソナード草案が個人主義的色彩の強かった点に関して異論が起きていたところに、日本人ドイツ法系の学者が強大な戸主権を認める日本の家制度の美風を損なうという意味の『民法出デゝ忠孝亡ブ』と題した論文を発表したのに対して、日本人フランス法系学者が草案を支持する民法典論争が起きた。</p> <p>第1回衆議院議員選挙</p> <p>第1回衆議院議員選挙の結果、<small>みんとう</small>民党が過半数を占めた。自由党が立憲自由党と改称していたのは、立憲の冠をつけることで、立憲改進黨所属議員の合流を画策したからである。</p> <p><small>きょういくちよくご</small> 教育勅語</p> <p>教育勅語は、天皇の御真影(写真)とともに学校に配布され、忠君愛国を強調した伝統的儒教的徳目と憲法や法治を重視する国体と明治憲法体制が一体不可分の体裁となった。</p> <p>第1回帝国議会(第一議会)[第一次山県有朋内閣]</p> <p>山県有朋は、<u>政府が政党によって行政を左右されない超然主義</u>超然主義で臨み、主権線(日本)と利益線(近年、利益線とは、朝鮮半島を勢力下に置くことを指すのではなく、日清英独の4か国で朝鮮を独立国として永世中立化させる構想があったことが判明)<u>確保のための予算を自由党の一部を買収工作で切り崩して成立させた</u>。自由党の一部が買収に応じたことを中江兆民は、“<small>むけつちゅう</small>無血虫の陳列場”と非難して衆議院議員を辞職した。</p>

年次	できごと
1891・11  品川弥二郎 靖国神社前 東京都 千代田区 (著者撮影)	第2回帝国議会（第二議会）〔第一次松方正義内閣〕   海相樺山資紀の「蛮勇演説」が発端となり、松方首相は、憲政史上、初の衆議院を解散した。この時、内相品川弥二郎が薩派閣僚の支持を受けて 選挙干渉 を行ったが、民党優位は変わらなかった。
1892・11	第4回帝国議会（第四議会）〔第二次伊藤博文内閣〕 伊藤は、維新に功績のあった薩長出身者で閣僚を固めた“元勳内閣”を現出させ、明治天皇の協力を得て和衷協同の詔勅（建艦詔勅）（今後6年間、天皇が宮廷費から毎年30万円下賜し、官吏俸給の10分の1を軍艦建造費に充てるので、議会も予算を通すように尽力しなさいという内容）を引き出して予算を通過させた。
1893・11	第5回帝国議会（第五議会）〔第二次伊藤博文内閣〕 外相陸奥宗光は、内地雑居を条件に条約改正交渉を進めていたのに対し、自由党を除く立憲改進黨ほかが対外硬派連合を組んで反対を唱え、内閣弾劾上奏案を可決したのに対し、伊藤は、衆議院を解散した。
1894・5	第6回帝国議会（第六議会）〔第二次伊藤博文内閣〕 自由党と対外硬派連合が協力して再び内閣弾劾上奏案を可決したのに対し、伊藤は、衆議院を解散した。ここで日清戦争が勃発し、伊藤、苦しい議会運営を乗り切った。
1895・11	自由党が第二次伊藤内閣との提携を発表

